

「なめとこ山の熊」論

——アイヌ神謡と比較して——

横山 明弘

はじめに

「なめとこ山の熊」のラストシーンは如何にも奇妙である。栗の木と白い雪の峰々に囲まれた山の頂上で、たくさんの大きな熊が雪に平伏して、小十郎の死骸を取囲んでいる。この場面について、梅原猛氏は『日本の深層 縄文・蝦夷文化を探る』の中で、「私はそこに熊のイヨマンテを見るのである」と述べている。⁽¹⁾イヨマンテとは周知のように、熊の霊を送るためのアイヌの宗教的儀式である。アイヌにとって熊は神であり、また生活必需品でもあった。

私はこの梅原説に触発されて、宮沢文学とアイヌ文化の関連を探ろうと思いついた。宮沢研究はあくまでも仏教との関連で為されなければならないと思っているが、東北的なものも宮沢を形成した一つの要因である筈である。東北地方はかつて蝦夷と呼ばれ、それはアイヌをさしていたとする説もある。⁽²⁾「なめとこ山の熊」は東北において消えゆくとするマタギを素材としたものである。アイヌもマタギも熊を捕ることが生活の中心であった。⁽³⁾

この論文の狙いはアイヌの動物観と宮沢のそれとを比較検討することにより、宮沢の思想に迫ることである。アイヌに関しては神謡と昔話を参考にした。

1. アイヌの動物観

アイヌ文学を読んで先ず気付くことは、非常に教訓性の強いことである。そのすべてが人が生きるための知恵・教訓・人間のあるべき姿などを説いた一大教典であり、信仰を母体に形成されたと言われている。⁽⁴⁾

アイヌ文学は韻文の物語と散文の物語に分けられ、さらに韻文の物語は「神のユーカラ」（神謡）と「人間のユーカラ」（英雄詞曲）に分けられる。「神のユーカラ」というのは神々が主人公となって自分の体験を語るという形式で、比較的短篇である。神とはクマ・オーカミ・キツネ・エゾイタチ・エゾフクロウ・アホドリ・シャチ・カジキマグロ・ヘビ・カエル・沼貝・トリカブト・オーウバユリ・アララギ・舟・錨・火・風・雷などである。「人間のユーカラ」というのは人間の英雄を主人公とした戦争と恋愛の長大な叙事歌謡で、世間で「ユーカラ」と呼んでいるのはこれをさしている。⁽⁵⁾これらの韻文の物語は節をつけて謡われ、聴いている人々も炉端を打って拍子を合わせた。

散文の物語は「ウエベケレ」（昔話）と呼ばれ、やはり「神のウエベケレ」と「人間のウエベケレ」があり、「和人のウエベケレ」を加えて三つに分類される。

ここでは問題意識に則り、「神のユーカラ」と「神のウエベケレ」を使用する。

アイヌ語で神のことを「カムイ」というが、藤村久和氏に拠ると、神とは素手で立ち向かえないもの・自分達の生活にとってそれがなければ生活しにくいもの・人間の生活に深く入り込んで切り離せないものをいう。⁽⁶⁾人間も死ぬと手に負えなくなるので、神と考えられていた。⁽⁷⁾

神々と人間との関係がよく窺える例を一つ要約してあげてみる。

熊捕りをしようとした酋長が獵小屋に寝ていると、毛皮の禿げた妖熊^{ほびぐま}が入ってきた。神には身分の上下があり、熊は最も身分の高い神であったが、人間に危害を加える熊は妖熊と考えられていた。ところがその妖熊は酋長を見ると後戻りし、木をへし折る音を立てながら叢を分けて去っていく。どうしてあんなに逃げ去っていくのかと不思議に思い、自分の体を見ると縄でぐるぐる巻にされているように見える。

どんな神さまが自分の危い所を助けてくれたのだらうと思ひ、眠りにつくと夢の中に青大将の神が現れた。その神が言うには、自分はこの獵小屋の下手の小川の砂原に棲んでいる青大将の神であるが、おまえがイナウ（日本の御幣にあたる）を搔くときには、いつもここへ削り掛けの塊を捨ててくれる。その御蔭で自分はますます神格の高い神に為れ、日頃有難いと思っていた。ふと見ると妖熊がおまえをとって食おうと喜んで下りてくる。それで自分の小袖（青大将の外装）をおまえに着せておいた。熊にとって蛇は最も恐ろしい生きものだった。

その翌朝酋長は起きて、イナウを削り酒を供えて、青大将の神を祭った。⁽⁸⁾それから獵に出ると熊や鹿がたくさん捕れ、酋長はますます長者になった。

このように神と人間とはお互い依存しあっていて、神は人間に祭られると神の世界で尊敬され、人間は神に護られて栄えるのである。

ところでアイヌは古くから漁労と狩猟による民族で、春から秋までは水辺に夏の家を建て魚を捕り、秋の末に山の手の冬の家に移って山狩を行う。つまり彼らは自らが神と仰ぐ動物や魚を殺害し食べることによって、生活を営んできた。この大きな矛盾は次のように解決される。

先に動物や魚を神と言ったが、厳密に言い直すと神の霊が一時的にそれらに宿っているのである。神々はその本国に於いて人間と同じ姿で人間と全く同様の生活をしており、人間の国に出かけるときは扮装してやってくる。人間が現実に見る動物の姿は仮の肉体であって、この肉体は神が人間に持ってくる土産と考えられている。アイヌが手ぶらでは他村へ行かないように、神々も手ぶらでは人間界へ行かないのである。動物の体は神々から戴いた土産であるから、それらを食べることは神意に添うことになる。

寧ろ肉体が死ぬことによって、神々は肉体から解放され、人間の家で賓客として歓待を受け、酒や米や団子やイナウをもらい、本国へ帰っていく。本国へ帰ると人間からもらったそれらの土産は何倍にもなる。そこで他の神々を集めて宴会を開き、人間の村での歓待ぶりや見聞談を語り聞かせる。すると他の神々も人間の世界へ行ってみようという気持ちになり、人間界は豊饒になる。その反対に人間が神々を粗略に扱うと動物が捕れなくなる。

また動物と出会うには山へ行行ったからといって、すぐに会えるものではない。その人物がそれ

なりの徳を積んでいて、この人は霊を粗末にしない人間だと認められたとき、神のほうからその人のところへやってくる。⁽⁹⁾ 神も山奥で野垂れ死にするよりも人間に捕獲され、人間の手によって手厚く送り届けられるほうが良いのである。⁽¹⁰⁾

今述べてきたことがよく理解できる具体例を「神のウエペケレ」から、一つ紹介しておく。

或る日、わたし（ワシの神）が樹の枝の上に止まっていたら、そこに二人の青年が山狩にやってきました。兄らしい青年が——身分の重いワシの神さまが、人間のところへお客になりたくて来られたようだ——射よう射ようといいいながら、背負っている胡録を傾けて、中からよい小矢を一本抜き出して、わたしを射た。わたしは、その矢を受け取り、神寂びたすがたになって、下にころがり落ちた。すると、その兄弟たちは、わたしを取り上げて、帰途についた。兄弟は村の酋長の息子たちであったから、わたしは、村の酋長の家に迎えられた。酋長の息子たちは、わたしを送る準備が出来るまで、その間、わたしを懇ろに養ってくれた。わたしを養うにも、八つの削り掛けを付けた飯箸で食べさせてくれるという風であった。わたしは、嬉しかったので、その飯箸を、八つの反り角の文様の付いた宝刀二本に変えた。準備が出来て、わたしは送られたが、クマ神の送りなどにも増して盛大に丁重に送られて帰ってきた。先の宝刀二本はイノウの中に入れてもらって帰ってきたので、このことをクマの大神（山の神）のあなたにお話するのだ。…（中略）…クマの神は、それを聞いて——おれも一つ行ったら、どんなものだろう——と思ったので、クマの神は出掛けた。⁽¹¹⁾（傍点引用者）

2. 小十郎と熊

つぎに小十郎と熊の関係を把握するために、しばらく筋を追いたい。

淵沢小十郎はすがめの赭黒いごりごりしたおやじで、熊捕りの名人だった。昔はなめとこ山の大空滝の辺りには熊がごちゃごちゃ居た。それを小十郎が片っ端から捕ってしまったのだ。だが熊達は小十郎のことが好きだった。

熊どもは小十郎がぼちゃぼちゃ谷をこいだり谷の岸の細い平らないっばいにあざみなどの生えてあるところを通るときはだまって高いところから見送っているのだ。

それもときによりけりで、小十郎の犬が火のついたまりのように飛びついたり、小十郎が眼を変に光らして鉄砲を構えている時は、あまり好きではなかった。

小十郎の方も熊を憎んでいるのではなく、熊を殺すことに罪責感を抱いているが、〈因果〉だと諦めている。罪責感を抱いていたことは、「熊ども、ゆるせよ」と言った最後の場面からも明白である。

「……ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまったし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞするんだ。てめへも熊に生れたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生れなよ。」

もう熊の言葉だってわかるような気がする小十郎は、ある年の春母熊とやっと一歳になるかならないような子熊が、淡い六日の月光の中で向こうの谷をしげしげと見つめているのに出会った。

まるでその二疋の熊の体からは後光が射しているようで、その親子の会話を聞いているうちに、小十郎は胸がいっぱいになってしまう。自分は今までこのような熊の幸福をどれくらい奪ってきたか。

「どうしても雪だよ、おっかさん谷のこっち側だけ白くなってゐるんだもの。どうしても雪だよ。おっかさん。」

「雪でないよ、あそこへだけ降る筈がないんだもの。」

「だから溶けないで残ったのでせう。」

作品「やまなし」のラストシーンにも、ほのぼのとした親子の会話がある。やまなしという自然の恵みを受ける場面である。宮沢は弱肉強食の世界に親子の団欒を挿入し、生を慈しんでいるのである。

さて熊に対して強者である小十郎が町へ熊の皮を売りにいくときは、全くみじめで気の毒だった。九十になる年寄と子供ばかりの七人家族のために、小十郎をうすら笑っている店の旦那に、「……お願いします。どうか何ぼでもいいはんで買って呉ない。」とおじぎさえする。そして結局安く買われてしまう。

……日本では狐けんといふものもあって狐は獵師に負け獵師は旦那に負けるときまってる。

ここでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。

宮沢はこの場面で人間と動物の間だけではなく、人間同士の間にも弱肉強食の論理が働いていることを的確に表現している。

ある年の夏小十郎が谷を涉って一つの岩に登ると、すぐ前の木に大きな熊が猫のように背中をまるめてよじ登っていた。小十郎がすぐに鉄砲をつきつけると、「おまへは何がほしくておれを殺すんだ。」「もう二年ばかり待って呉れ、おれも死ぬのはもうかまはないやうなもんだけれども少しし残した仕事もあるしたゞ二年だけ待ってくれ。二年目にはおれもおまへの家の前でちゃんと死んでゐてやるから。毛皮も胃袋もやっしまふから」と懇願される。小十郎は栗かしたのみでも食って、それで死ぬなら死んでもいいような気がして、せつなくなって帰っていった。

それから二年後口からいっぱい血を吐いて倒れている熊を見た。小十郎は思はず拝むようにした。

約束どおり家の前で血を吐いて倒れていた熊の自己犠牲的な生をつきつけられ、小十郎は衝撃を受けたに違いない。罪責感を一層深め、最早押さえることができない。小十郎はこの時今までの罪を贖うために、あるいは罪責から逃れるために、死を決意したのではないか。少なくとも獵師に必要な闘争心を失ったのではないか。闘争心を失って過酷な獵に出ることは、死を意味している筈である。

「婆さま、おれも年老ったでばな、今朝まづ生れで始めて水へ入るの嫌んたよな気するちゃ」

すると縁側の日なたで糸を紡いでゐた九十になる小十郎の母はその見えないやうな眼をあげてちょっと小十郎を見て何か笑ふか泣くかするやうな顔つきをした。

小十郎は白沢の岸を溯り、谷に入ってくる小さな支流を五つ越え、何べんも何べんも水を涉っ

て溯っていった。小さな滝があり、その崖を登りきって頂上で休んでいた時、大きな熊が両足で立ってこっちへかかってきた。小十郎は鉄砲を構え、ぴしゃという鉄砲の音も聞いたが、がんと頭が鳴ってまわりがいちめんまっ青になった。「熊ども、ゆるせよ。」と小十郎は思った。

それから三日目の晩、山の上の平らにたくさんの黒い大きなものが環になって集まり、じっと雪に平伏したままいつまでもいつまでも動かなかった。雪を月あかりで見ると、一番高い所に小十郎の死骸が半分座ったように置かれていた。その顔は生きているときのように冴え冴えして、何か笑っているようにさえ見えた。

この場面を梅原氏は「熊のイヨマンテ」と呼んだのだが、それについては次節で述べたい。

3. 熊が送る儀式

イヨマンテとは熊の霊を天に送る儀式で、熊に対する感謝とこれからの豊猟を祈ったものと考えられている。春先に小熊を捕え、大切に育てて秋に送る。冬はアイヌにとって山狩の季節なので、その季節の初めに盛大な祭を行って、山の神に山の幸を授けてくれるように祈るのが熊祭なのである。春の雪山の穴で捕られた子熊は部落の賓客として何日も部落中の歓待を受け、酒や魚や団子や木の実などの人間界の土産を持たされて、神の国に送られる。すると天に居る他の熊たちが土産を持って人間の所へ訪れてくるのである。

動物の肉体は神が人間に持ってくる土産であるというアイヌの思想に対して、梅原氏は次のように述べている。

人類は長い狩猟採集生活の末に、動物の殺害を合理化する哲学を考えたにちがいないのである。おそらく動物の殺害は不快感を伴ったにちがいない。その不快感を除去し、動物の殺害と食肉を合理化する哲学として、彼らは動物を土産を持って人間社会に現われた客人であるという神話を考え出したのであろう。⁽¹²⁾

この梅原説に従うと、イヨマンテとは動物の殺害と食肉を合理化する象徴的儀式とも受けとれるのである。

宮沢の場合「なめとこ山の熊」で見えてきたように、動物の殺害と食肉を合理化することはできなかった。

それから小十郎はふところからとぎすまされた小刀を出して熊の顎^{あど}のところから胸から腹へかけて皮をすうっと裂いて行くのだった。それからあとの景色は僕は大きらいだ。

突然語り手が顔を出して、感覚的な不快感を表白するのである。

宮沢が動物とそれを食べる人間との関係を深く考察していることは、「フランドン農学校の豚」や「ビヂテリアン大祭」を読めば一目瞭然である。その「ビヂテリアン大祭」の中に次のような一節がある。

もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方がないから泣きながら食べてもいい、そのかはりもしその一人が自分になった場合でも敢て避けないとかう云ふのです。けれどもそんな非常の場合は、実に実に少い^{ママ}から、ふだんはもちろん、なる

べく植物をとり、動物を殺さないやうにしなければならない、……

小十郎は常に＜非常＞の場合に生きていたので、同情をもって描かれている。

ところでこの「もしその一人が自分になった場合でも敢て避けない」という思想は、「銀河鉄道の夜」においても蝸を通して描かれている。今まで自分はいくつもいくつも命を取ってきたのに、自分がいたちに捕られようとしたとき、自分は一生懸命逃げて、井戸の中に落ちてしまった。

そして蝸は後悔する。どうしてだまっていたちにこの体をくれてやらなかったのだろうと。それに対して小十郎は逃げないで、自分の罪を贖うために、熊に自分の体を投げ出したと考えられる。もちろん重ねて言うが、その契機となったのは熊の自己犠牲的な死である。

大正八年の下旬頃書いたといわれる「手紙一」は、宮沢が＜捨身＞についてどのように考えていたかがよくわかる話である。

今まで悪業ばかりはたらいていた竜があるとき改心して、すべてのものを悩まさないと誓う。その竜が眠っていたとき、猟師たちがやって来て、皮をはぎはじめる。竜は最早この体は投げ捨ててこらえようと覚悟する。そして皮のない赤い肉になった竜が、水のあるところへ行こうとすると、小さな虫がその体を食おうと出てくるのを見る。竜は「いまこのからだをたくさんの虫にやるのはまことの道のためだ。いま肉をこの虫らにくれて置けばやがてはまことの道をもこの虫らに教へることができる」と考えて、虫に体を食わせ、とうとう乾いて死んでしまう。死んで竜は天上に生まれ、お釈迦様になって、みんなに一番の幸福を与えたという話が書かれている。

この話から類推すれば、小十郎も天上に生まれ、菩薩となったのだろう。最後の「冴え冴えとした笑顔」はそのことを物語っている。だから熊たちはその生き方を称えて、雪に平伏したままでじっと動かずに、小十郎の霊を慰め送っているのである。

私はこの作品は、先に引用した「もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方がないから泣きながら食べてもいい、そのかはりもしもその一人が自分になった場合でも敢て避けない」という思想を形象化したものだと考える。

芸術作品における登場人物は作者の分身だと言われるが、小十郎も明らかに宮沢の分身なのである。自分も食べているのだから、自分が必要とされれば身を投げ出さなければならないというのが宮沢の倫理であった。宮沢の自己犠牲的な生はこのような認識から生まれたのだろう。

さて宮沢が自らベジタリアンであり、動物の殺害と食肉を合理化できなかった核心的思想について、最後に言及しておきたい。

総ての生物はみな無量の劫から流転に流転を重ねて来た。…（中略）…一つのみたましひはある時は人を感ずる。ある時は畜生、則ち我等が呼ぶ所の動物の中に生れる。ある時は天上にも生れる。その間にはいろいろの他のたましひと近づいたり離れたりする。則ち友人や恋人や兄弟や親子である。…（中略）…無限の間には無限の組合わせが可能である。だから我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である。（「ビジタリアン大祭」）

私は前にさかなだったことがあって食はれたにちがひありません。又屠殺場の紅く染まった床の上を豚がひきずられて全身あかく血がつかしました。転倒した豚の瞳にこの血がパッとあ

かくはなやかにうつるのでせう。忽然として死がいたり、豚は暗い、しびれのする様な軽さを感じやがてあらたなるかなしいけだもの生を得ました。これらを食べる人とても何とて幸福でありませうや。(大正七年 保阪嘉内宛書簡)

アイヌは動物を神と崇め、その肉体を自分たちへの土産と考えたが、宮沢は仏教の輪廻転生思想を深く信じていたが故に、肉食を合理化することができなかった。宮沢は輪廻を断ち切った釈尊に倣おうとしたのである。アイヌの思想と宮沢のそれとを峻別するのは、やはり仏教であると言えるのである。

おわりに

ここでアイヌと宮沢との関連で興味深い問題を二点あげておきたい。

第一点はアイヌの九割がたが最も遅れて道内に入った日蓮宗に帰依していることである。明治三十年代に各集落に入って、明治四十年から大正七・八年にかけてほとんどが帰依している⁽¹³⁾のである。残りの一割はキリスト教か神道である。なぜ日蓮宗かという問題は明らかでない。

第二点は神謡や昔話を読んで気付いたことだが、夢が重要な役割を果たしている点である。例えば人間が鹿や魚を粗末に扱っている⁽¹⁴⁾ので、鹿の神・魚の神が怒って、それらを出さない。それを知った梟の神が夢の中で、人間にそのことを知らせてやるというのである⁽¹⁵⁾。実生活においても来客があるということは、夢で見ている予知できる人が多いということである。宮沢の作品においても夢が重要な役割を果たしている⁽¹⁵⁾ので、この問題は大へん興味深い。

〔註〕

- (1) 梅原猛 『日本の深層 縄文・蝦夷文化を探る』 佼成出版社 1983年 80頁
- (2) 梅原猛・埴原和郎 『アイヌは原日本人か』 小学館 1982年 167頁 徳川時代まで、蝦夷とはアイヌのことをさすと考えられていた。
- (3) マタギ言葉とアイヌ語には多くの類似があると言われている。世界大百科辞典1「アイヌ」の項 平凡社 1972年 39頁
- (4) 藤村久和 『アイヌの霊の世界』 小学館 1982年 10頁
- (5) 知里幸恵編訳 『アイヌ神謡集』 所収 知里真志保の解説 「神謡について」 岩波文庫 1978年 164頁
- (6) 藤村久和 『アイヌ・神々と生きる人々』 福武書店 1985年 17頁
- (7) 前掲書(6) 176頁
- (8) 久保寺逸彦編著 『アイヌの昔話』 「青大将に助けられた酋長の話」 三弥井書店 1971年 143頁
- (9) 前掲書(6) 192頁
- (10) 前掲書(6) 198頁
- (11) 前掲書(8) 「山の神の昔話」 46頁

- (12) 新岩波講座 『哲学12 文化のダイナミックス』 所収 「XI伝統と創造」 331頁
- (13) 前掲書(4) 18頁
- (14) 前掲書(5) 「梟の神が自ら歌った謡」 103頁
- (15) 前掲書(4) 100頁